

序文／導入 Introduction

I. 戦略的文脈：＜概念的なもの＞の性質(Strategic Context: The Nature of the Conceptual)

- 本書の対象：「概念 concepts」の使用と内容(p.1)、概念的なものそのものの性質(p. 2)

「言語表現の意味および志向状態(intentional states)の内容、実に意識(awareness)<sup>1</sup>そのものは、はじめから、理由付け(推論) reasoning において判明な(独特の?)種類の役割を果たすという点から理解されるべきである」(p. 1)

- 本書の概要

第1章：意味論的説明の順序(order)において指示(reference)よりも推論(inference)が優先するという考えを提示

第2章以下：この考えを用いて、様々な哲学上の重要問題に取り組む

- 行為論における実践的 reasoning と規範的概念の役割(第2章)
- 認識論(epistemology)における知覚と信頼性の評価の役割(第3章)
- 単称語と述語に特有な表出的役割(それは、文部分的 subsentential)表現として、前提や結論という直接に推論的な役割を果たすことができない(第4章)
- 命題的態度帰属 propositional attitude ascriptions と概念使用の表象的次元(第5章)
- 概念的(概念の、概念上の?)客観性の性質(第6章)

ここ(序文)では、ここで追求されるプロジェクトをより大きなコンテキストに位置づける。

概念的なものを扱うという選択に既に含まれている強調点

- 心の哲学:単なる感覚能力 sentience<sup>2</sup>よりも知性能力 sapience の<sup>3</sup>意味における自覚(awareness)

---

<sup>1</sup> Bewusstsein

<sup>2</sup> Empfindungsfähigkeit

<sup>3</sup> Verstandesfähigkeit

- 意味論：ほかの種類の内容充足 contentfulness でなく、特に概念的な内容
- 語用論 pragmatics：他の種類の様々なスキル行為 skillful doing ではなく討議的／論弁的 discursive（つまり概念を使用する）実践

「目的は、＜概念的なもの＞に焦点を当て、概念的なものを何かに適用することに（それは典型的にはそれについて何かを言ったり考えたりすることによって適用されるのだが）その本質があるような種類の、その何かの自覚 (awareness)について比較的明確な概念(notion)を練り上げること」

ここ（序文）ではこの議論の背景にある基本的な説明上の戦略を明確にする。一連の厳密に二元論的な対立の形で(As a series of stark binary oppositions)。

### 1. <概念的なもの>の同化か、それとも差異化か？ (*Assimilation or Differentiation of the Conceptual?*)

• discursive な生物：概念使用者の判断と行為  
と

• non-discursive な生物：概念を使用しない有機体の環境情報の取り込みや道具的介入

の連続性 or 非連続性？

ここで Brandam は非連続性を強調する。「何が概念的なものそのものについて特殊で特徴的なのか」に関心。

連続説：現代の意味論(Dretske, Fodor, and Millikan)、アメリカの古典的プラグマティスト、おそらく後期ヴィトゲンシュタイン

### 2. 概念のプラトニズムか、それともプラグマティズムか？ (*Conceptual Platonism or Pragmatism?*)

- プラトニズム戦略：内容→使用

「概念内容の優先的(第一義的？ prior)理解によって概念の使用を説明する。」

→「典型的には、平叙文で表現されたり信念に所有されたりした内容を可能世界の sets、あるいは他の仕方で特殊化された真理条件と同一視す

る。

→「主張を行う際に文を使用し、reasoning や行為を導く際に信念を配置することがいかに適切であるのかについての我々の理解に、そのような内容を文や信念と結びつけることが、いかに貢献するのか」を説明しなければならなくなる。

- プラグマティズム（一種の機能主義）戦略：使用→内容  
概念適用という実践や行為に関するストーリーから始め、その基礎の上に概念内容の理解を練り上げる」「補足的説明戦略」  
→「どのようにして、言語表現の使用や志向的状态の機能的役割が概念内容を、その表現や志向状態に与えるのか」を説明する

=>後者：Brandam の立場：「何かをどのようにして(how)なすべきか（なすことができるのか）によって、しかじかの内容が当てはまっているということ(that)を知ること（信じること、いうこと）」を説明する

「それは表現の使用と信念の獲得と配置の実践において暗黙の（暗示的／潜在的）ままであるものの方向から概念的に明確な（明示的／顕在的）命題や原則の内容にアプローチする」

→「行為によって内容を説明する」

### 3. 志向性の基本的場所は心か、それとも言語か？(Is *Mind or Language* the Fundamental Locus of Intentionality?)

- デカルトからカントまでの哲学的伝統：心を概念使用の *native and original* な場所として特権視。言語→意思伝達において二次的、後発的 *late-coming*、道具的役割(a mentalistic order of explanation)
- 20世紀（哲学思想における言語の世紀）：
  - ・ダメット「志向性の言語理論」（→セラーズ、ギーチ）「(…)判断はむしろ外的な主張行為の内面化である」：言語使用を先行し、かつ独立して理解可能なものとみる。思考は一種の内的 saying
  - ・デイヴィッドソン：「サピエンスに対する言語の意味についての相関的見方」：  
「概念使用は言語使用を含まない文脈においては理解可能ではないと考え

るが、言語実践は同時に信念のような志向状態 intentional states に訴えることなしに意味をなしうるとは主張しない」(p. 6)

→ブランドムの立場：「概念的なものに対する相関的言語的アプローチ」(p. 6)：「概念使用は本質的に言語上の出来事(linguistic affair)として扱われる。主張することと信じることは一つのコインの二面である。しかしそれは、すべての信念が明言(asserted)されなければならない、あるいはあらゆる主張(assertion)が信念を表現しなければならない、という意味ではなく、信じるという行為も言明するという行為も他方のものから独立しては意味をなし得ず、それらの概念内容は本質的に、そして単に偶然的にではなく、主張であろうと信念であろうとどちらでも関係なく indifferently、内容であることができるという意味でそうなのである」(p. 6)

→言語的プラグマティズム：セラーズのスローガン「概念を把握することは言葉の使用をマスターすることである」

ジェイムズ、デューイ：プラグマティストではあるが、特に言語的プラグマティストというわけではない。

言語的プラグマティスト：後期ヴィトゲンシュタイン、クワイン、セラーズ、ダメット、デイヴィッドソン

意味についてのプラトン主義：フレーゲ、ラッセル、カルナップ、タルスキ

#### 4. 概念的行為の類：表象か、あるいは表現か？(The Genus of Conceptual Activity: *Representation or Expression?*)

- 表象：デカルト以降、啓蒙的認識論と意味論のマスターコンセプト：鏡：受動的反省

×

- 表現：ヘルダー、ロマン主義：ランプ：能動的発見 (revelation 啓示)

●

→ブランドムの（相関的）表出主義((relational) expressivism)：

①内的なものを外的なものに変える（ヘルダー）のではなく、「implicit なものを explicit にする(making explicit what is implicit)」(p. 8)。

=プラグマティズム的理解：「はじめする do ことだけができるものと言う say ことができるものに変える」：how→that

②明示／外示性 explicitness の概念 notion は概念的なものになる。明示化のプロセスは概念適用のプロセス、ある主題となる事柄の概念化

③これを、相互関係を考えることなしに個別に理解できるものとする必要はない（×ヘルダーのジェスチャーモデル）

「implicit なものの特定はそれを explicit にすることの可能性に依存することもある。そして explicit なものは explicit にされるものについての考察から切り離されては特定できないかもしれない。」(p. 9)

「表現されるものは、それを表現することの可能性によって理解されなければならない」ibid.

「そのような相関的表出主義は言語によるパフォーマンスとそれらが表現する志向状態を、それぞれそれらの関係によってのみ理解可能な全体における本質的な要素として理解する。」ibid.

こうした表出主義は必然的に相関的言語的アプローチを帰結する

⇔表象主義はプラトン主義的アプローチを帰結する

→一種の構成的、プラグマティズム的、相関的言語的、概念表象主義(one kind of constitutive, pragmatist, relationally linguistic, conceptual expressivism) (p.9)

分析的意味論だけでなく、ソシュールの意味論に由来する構造主義やポスト構造主義もまだ表象主義にとらわれている。現代のプラグマティズムも不十分。

5. <概念的なもの>を区別する：内包主義か、あるいは推論主義か？

(Distinguishing the Conceptual: *Intensionalism* or *Inferentialism*?)

内包主義：「概念的なもの（あるいは志向的なもの）は特殊な種類の内包 intensionality によって区別される。同じ指示のつまり同じ外延の表現あるいは概念の相互置換は志向的状态の帰属内容を保存しない」

推論主義：

特に discursive 実践を、概念を使用しない被造物の行い doings から区別するの

はそれらの推論的分節化(inferential articulation)。Cf. 1.

- オリジナル・ロマン主義の表出主義、プラグマティズム（古典・現代）：同化主義(assimilationists)
- ブランドム：例外（排除）主義(exceptionalist)=概念的なものそのものに特徴的な種差に焦点を当てる。

この立場は：

1. 合理主義的プラグマティズム(rationalist pragmatism)：理由を与え、理由を求める実践を重視。概念内容をパフォーマンスや表現や状態に与えることとして、こうした実践を理解する」

こうした立場と区別される pragmatists=デューイ、ハイデガー、ヴィトゲンシュタイン、ダメット、クワイン

2. 合理主義的表出主義：「何かを表現すること、つまり何かを explicit にすることを、それが理由として役立ち、理由を必要とする形式のうちに、それを置くこととして理解する」＝「それが推論において前提としても結論としても役立つような形式」 p. 11

「『事柄はかくかくである』と言うこと、あるいはそう考えることは、推論を通じて(inferentially)分節化された、判明な種類のコミットメントを引き受けること」

=

- ① それをさらなる推論に適した前提として提示すること
- ② つまり、その使用をそのような前提として権威づけること
- ③ 自分自身にそのコミットメントの権利を与え、適当な状況下で、その人の権威を立証する責任を引き受けること（たとえば典型的には、その人が権利を与えられている、あるいは権利を与えられることとなりうる、他のそのようなコミットメントからの推論の結論としてそれを明らかにすることによって）

→「そのようにして明示化すること(such a making explicit)において適用される概念を把握するということは、その推論的使用をマスターすることである」(cf. セラーズ)

<フレーゲ>

①根本的プラグマティズム的原理：「主張を述べることに於いて、ひとは自分自身をその真理にコミットさせている」(p. 11)

二つのやり方：

1. プラトニズム的：内容→言語行為
2. 言語的プラグマティズム：言語行為→内容

②根本的意味論原理：「よい(妥当な good)推論は、真なる主張（可能なもの）から真ならざる主張に導かれることはない」(p. 12)

二つの理解

1. スタンダード：真理概念→推論
2. 相関主義あるいは推論主義プラグマティズム：推論→真理  
「よい(good)推論とわるい(bad)推論の間の実践的な区別から出発し、それを適切な(appropriate)行為と不適切な行為(inappropriate doings)の区別と理解し、そして真理についての語りをよい moves によって保存されたものについての語りとして理解する」(p. 12)。